

事例番号 070 市・専門家・住民の連携によるきめ細かな空間づくり
(福井県越前市(旧武生市)・蔵の辻)

1. 背景

越前市は福井県中央の武生盆地に位置する都市である。大化の改新の頃には越前の国府が置かれ、古代から北陸の政治、経済、文化の中心地として栄えた。江戸時代には本多氏の城下町として栄え、越前打刃物、越前和紙、越前瓦等の伝統産業が育った。1869年(明治2年)に府中を武生に改称、1948年(昭和23年)に武生市となり、2005年(平成17年)10月に今立町と合併して越前市となった。

越前市は北陸本線、福井鉄道、北陸自動車道等の交通機関が整備され、関西圏、中京圏、福井市、敦賀市等との連絡がよく、電子、自動車、家電部品産業が盛んで、県内トップの工業出荷額をほこり産業都市として発展している。

市街地の現状に関しては、他の多くの都市に見られるのと同様、モータリゼーションの進展により旧市街地の空洞化が進んでいる。郊外に立地した大規模小売店の販売額が伸びている一方で中心市街地の商店街の売り上げは減少を続け、閉鎖する店舗も増加してきた。このような状況に対し、越前市では地元商業関係者と行政との連携の下、伝統文化や観光に重点を置いて中心市街地の活性化を図ってきている。本稿で採り上げる「蔵の辻」はそのような動向の中でとりわけ先進的な取り組みが行われた事例である。



越前市の位置 (資料:越前市)

2. 目標

旧武生市は「輝かしい伝統にはぐくまれ、夢と誇りがもてる、水と緑豊かな丹南の中核都市」を目指していたが、越前市の新市建設計画(計画期間:2005年度～2014年度)では、「21世紀に人・地域が輝く住民主体の自立都市」を都市の将来像として掲げている。具体的には、「越前の国府

が置かれたこの地域の誇りを、市民一人ひとりが胸に刻みながら、①人・モノ・情報の交流拠点としてのにぎわいのある自立する都市、②自然と共生した快適な生活環境を備える都市、③伝統文化を大切に郷土の心を育む都市を目標に、21世紀に新たな伝統を積み重ね、人・地域が輝く住民主体の自立した新都(中核都市)を目指す」とされている。この目標を踏まえて示された以下の「まちづくりの視点と将来都市像」は、これからの時代の都市づくりのあるべき方向を示すものと思われる。

「3つのまちづくりの視点」

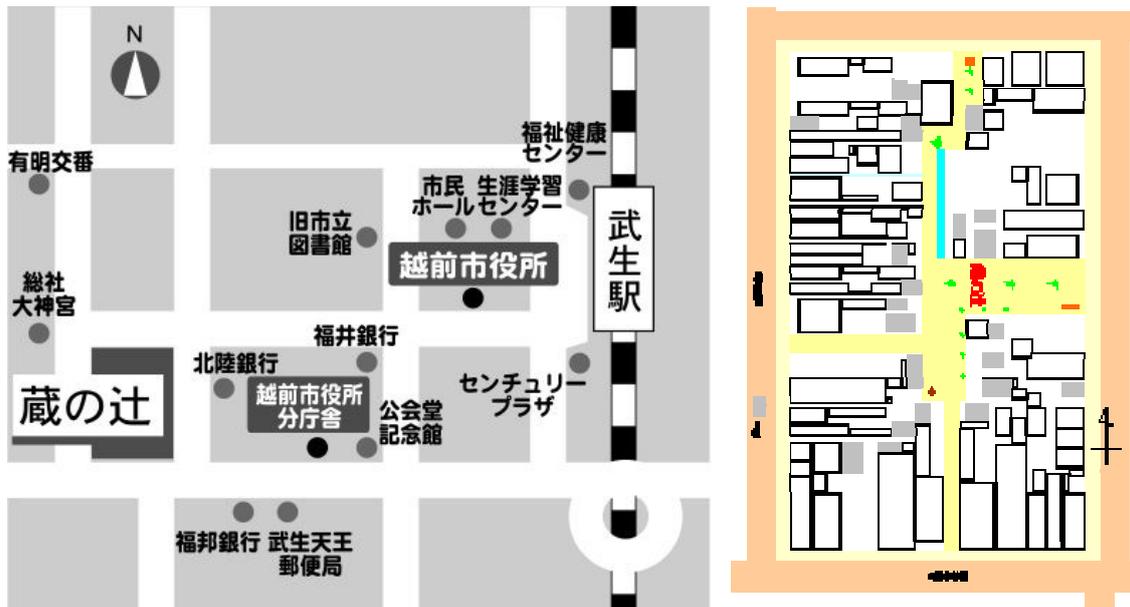
- ① 市民主体(市民と行政の協働の下、市民が主体となってまちづくりに取り組む視点)
- ② 地域特性(それぞれの地域特性を生かすことで都市の個性と活力を高める視点)
- ③ 環境共生(都市に関わる全ての活動に、環境との共生を念頭に取り組む視点)

「将来都市像と9つのプログラム」

- ① 交流拠点都市(にぎわいのある交流拠点機能と自立機能の向上)
 - 1) 拠点都市機能を支える都市基盤の整備 / 2) 近代と伝統が調和した産業の振興
 - 3) 市民主体のまちづくりの推進
- ② 生活快適都市(環境と共生した快適で安全安心な生活環境の整備)
 - 1) 自然環境と調和した都市の形成 / 2) 健康と安心を支える環境づくり
 - 3) 安全に暮らせるまちづくり
- ③ 伝統文化都市(豊かな心・郷土の心を育む生涯学習環境の充実)
 - 1) 伝統文化の継承と創造 / 2) 豊かな心の醸成 / 3) かよいあう心の醸成



越前市の観光スポット (資料:越前市)



「蔵の辻」の位置(左)及び敷地利用状況(右) (資料:越前市)

3. 取り組みの体制

市民、専門家、行政の連携による。

4. 具体策

(1) 経緯

越前市では上記の視点の下、国土交通省の「街なみ環境整備事業」(1993年に創設された制度で、土地所有者等による「街づくり協定」の下で街なみ整備のためのさまざまなソフト、ハードの費用に対し補助を行うもの)を市内2箇所(京町地区、蓬莱町地区)で行ってきた。本稿で紹介する「蔵の辻」は蓬莱町地区で行われた街なみ環境整備事業の事例である。

蓬莱町はJR武生駅から西方400メートル先の、駅前通り北側の地区である。北陸道が鍵型に曲がる地点にあり、かつては「札の辻」が置かれて往来の盛んなところであった。現在でも市の中心市街地の「へそ」であるものの、商店街の空洞化は顕著に進んでいた。そのため、この地区では「街なみ環境整備事業」に至る以前にも市街地再開発事業による地区活性化の試みが行われていたが、それが頓挫して「街なみ環境整備事業」に移行することとなった。その経緯は以下のとおりである。

1976年 「歴史的遺産を活かした既存商店街活性化についての研究会」の実施

同年 「商業近代化地域計画」で同地区と駅前地区が「最重点地区」とされる。

1982年 「蓬莱町地区再開発協議会」設立(住民、市、専門家)、近代的なまちづくりを志向する。

1993年 市街地再開発事業の断念(テナント誘致が不調であったため)

1994年「蓬萊地区再生事業推進協議会」設立（「再開発協議会」から継承）
市、協議会が計画立案・助言を地元の建築家に依頼
近代的な再開発から一転し、「古くから残る蔵や古い建物などを保存、再生した「蔵のあるまち」として、歴史的なまちなみにふさわしい環境の整備を図ること」をコンセプトとすることを決定する。

1995年「街なみ環境整備事業」導入を決定、「まちづくり協定書」締結
地元の建築家に事業コーディネーターを依頼

1996年「街並み環境整備方針」策定

1997年「街並み環境整備事業計画」策定

(2) 街なみ環境整備事業の内容

街なみ環境整備事業は1995年～2003年の事業期間で行われた。その内容は以下の7つに分かれる。

① 街なみ整備事業・ハード(市施行)

安全快適な歩行者空間を整備(通路、広場(名称「蔵の辻」)、水路を整備
地区整備面積1.6ha

② 街なみ修景助成事業(市施行・地元施行)

地元住民の整備する住宅等の外装、外構等の修景に対する補助金交付

③ 蓬萊地区地区計画(都市計画決定)

建築物等の用途、形態、意匠の制限

④ 蓬萊町まちづくり協定(地区住民)

歴史的建築物である蔵等を保存・活用し、歴史的まちなみにふさわしい住環境の整備・改善を推進

⑤ 商業振興

新規出店者の誘致

⑥ イベントの開催(商工会議所・商店街・市民団体等)

広場(蔵の辻)を利用したイベント等の開催

⑦ 地区施設の維持管理(蓬萊地区再生事業推進協議会)

(3) 評価

地元商店街を含むさまざまな市民・団体等が「蔵の辻」を中心としたイベントを開催するようになった。他事業とも連携したイベントも開催されるようになり、人の賑わいが戻りつつある。蓬萊町の周囲には数多くの歴史的遺産(神社仏閣等)があり、また、同地区は駅前にも近いことから、人々の回遊性も見られるようになった。また、地区内の蔵を活用した新規出店が見られるようになった。

本事業の取組み高く評価され、市と地元協議会である「蓬萊地区再生事業推進協議会」とが2001年度に国土交通省の都市景観大賞「美しいまちなみ大賞」を受賞した。



「蔵の辻」の風景 (写真提供:越前市)

5. 特徴的手法

(1) 役割分担

市、専門家、住民の役割分担が有機的に行われたことがひとつの大きな特徴である。

(市) 住民から用地を買収して街路を整備、完成した街路の管理責任を住民に移行

(専門家) 関係者間の意見調整、住民の建築活動に対する助言・利用促進策提言、
テナント誘致

(住民) 主体的な建築活動、公共施設の管理(清掃、利用ルール決定等)

(2) 人間的空間の形成

経済性追求の大規模開発を追求せず、伝統的環境を活かした人間規模のきめ細かな空間を形成したこと(路地のように通り抜けられる通路を設けたこと、小さな広場を設けたこと、曳家等により蔵の再生を図ったこと、新築の建築物も街並みに調和するものとしたこと等)により、従来、「裏」だった蔵が「表」になり、テナントが入るようになった。

(3) 市街地再開発事業の頓挫

市街地再開発事業の頓挫が転機となって自らの視点に立ち返り、今後のまちづくりは歴史に培われた伝統文化及び自分たちの生活の延長として捉えなければならないと考えるようになった。

6. 課題

他の地区と連携しつつ交流の範囲を徐々に拡大していくことが課題である。

(参考・引用文献)

越前市ホームページ <http://www.city.echizen.lg.jp/index.jsp>

武生商工会議所ホームページ

『造形』no.33(2001年夏号)、建築資料研究社

日本建築学会編『まちづくりの方法』丸善、2004年